

令和 かわら版 諏訪形

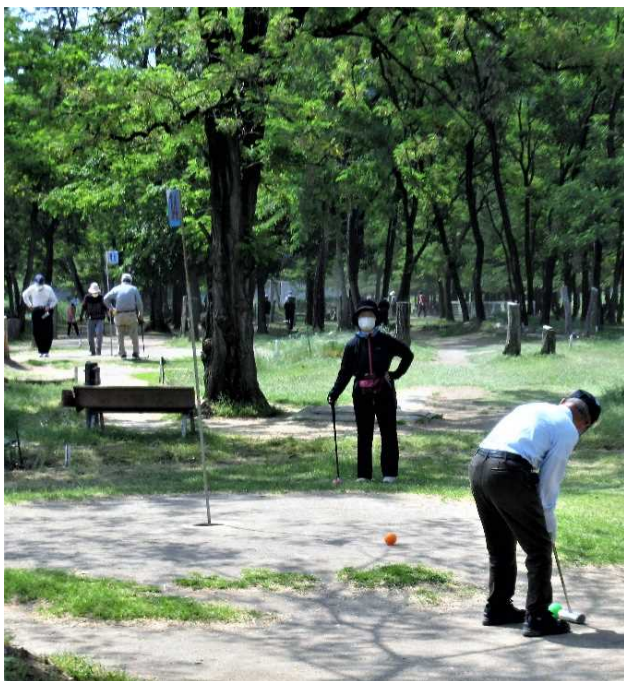
第7号
諏訪形自治会
会長:稲垣敦史

諏訪形交流親睦会

五月三十日(日)、二年ぶりの交流親睦会が開催されました。感染症対策に留意しつつ規模を縮小して実施しましたが、四つのイベントに予想を超える四十数名の皆さんの参加があり、大いに親睦を深めることができました。

○マレットゴルフ大会

晴天に恵まれ、小牧橋マレットゴルフ場で参加者十二名による大会が開催されました。例年より少なめではありましたが、豪快なショットとパッティングで、爽快感を満喫しながら笑顔溢れる交流を楽しみました。河川の地形を生かしたコースで、爽やかな風とともに健康的に親睦を深めることができました。なお、マレットゴルフクラブの皆さんの積極的なご支援に心から感謝申し上げます。



心地よい新緑の中、ねらいを定めて。

○千曲川堤防見学会

講師に市議の宮下省二さんをお迎えし、小学生一名を含めた六名が参加しました。一昨年の台風十九号の災害状況と復興の軌跡を、赤い鉄橋復旧の現場でお聞きしました。併せて、一七四二年の大洪水「戌の満水」の悲惨な被害状況の説明もあり、改めて防災の重要性を認識しました。また、現在千曲川は、外来魚コクチバスの増殖という問題を抱えており、その対策が課題となっているとのこと。

○諏訪形の道祖神巡り



別所線赤い鉄橋をバックに記念撮影をしました。昭和30年代の諏訪形の千曲川は、今と違って左岸寄りを流れていて、諏訪形の子もたちはよく川遊びをしたそうです。今だったらNGですね。

参加者の皆さんからは、「改めて諏訪形のことを知ることができ、とても良い企画でした。」とのことのお褒めの言葉をいただきました。



熱心に説明を聴く参加者の皆さん。実は、この場所に道祖神はありませんので、北田中道祖神を合成してあります(すみません)。この道祖神は、本当は城下小学校体験水田(窪田和人さん提供)のそばにあります。

諏訪形誌刊行委員長北沢伴康さんを講師に、七名で諏訪形の五つの道祖神を巡りました。巡った順に、北田中道祖神、道近田道祖神、高町道祖神、東浦道祖神、堂村道祖神です。道祖神とは、「疫病や災害などをもたらす悪神や悪霊が村に入ってくるのを防いでくれる神」とのことです。また、祀られている場所が村境となっており、諏訪形ではおおむね村の東西南北にあたる地籍に立てられています。諏訪形にある道祖神は、いずれも建立年は不明だそうです。

諏訪形の皆さんも、五ヶ所の道祖神を探して、諏訪形の歴史の奥深さに触れてみてはいかがでしょうか。それぞれの場所は、『諏訪形誌』二五九ページをご参照ください。

○諏訪形の神社巡り

諏訪形誌活用委員の窪田善雄さんを講師に、荒神宮と諏訪神社を巡りました。参加者は、講師も入れて十八名です。荒神宮では、本殿に奉納された絵馬の数々を見学、遠くは大阪からの例もあり、全国レベルで信仰を集めていたことに驚かされました。中国の故事を題材にした本殿彫刻も見事でした。その後、田植えを終えたばかりの水田の脇を歩き、諏訪神社へ向かいました。途中、お葬式の風習で使われた「廻り場」も見学しました。

諏訪神社では、説明板の誤記の訂正の話や行方不明の棟札の話、さらに境内の別神社、天神社と蚕神社の来歴を説明してもらいました。諏訪神社に祀られている建御名方神は、『古事記』などに登場します。もちろん神話は歴史事実ではありませんが、縄文文化から弥生文化への転換、大和政権の拡大といった歴史事実を反映しているという話は、大変興味深いものでした。



荒神宮では思いもかけず、今井宮司様からお祓いの神事を受けることができました。大幣(おおぬさ)で頭上をはらっていただき、人形紙に各自邪気を吹きかけ、お宮に託しました。

道路拡幅に向けて

「まちづくり協議会」による廃屋空き家美化作業については、前号で報告しましたが、その継続事業として、隣接道路の拡幅に向けての整備作業に着手しました。所有者のご了解と、のべ九十二人のボランティアの皆さんの協力をいただき、作業を完了することができました。深く感謝申し上げます。

○六月五日(土) 廃屋の下屋撤去作業



道路にせり出す下屋と、道路ぎりぎりに隣接する土蔵を撤去することで、道路拡幅を市へ要望することが可能となります。6月5日、まず下屋撤去作業に着手しました。



狭い道路と進む作業



下屋撤去作業完了

○六月十九日(土) 土蔵撤去作業の開始



道路ギリギリに建つ土蔵。瓦ぶき、厚い土壁、側面下部を下見板張りで補強した典型的な農家倉庫。築百年ほどと思われます。



金窓寺川周辺 草刈り作業

6月6日(日)、約30名の皆さんの参加で、「草ぼうぼう」だった金窓寺川周辺がすっかりきれいになりました。



↑最後の柱を撤去して作業完了



土蔵の跡地にて



雨の中、↑瓦の撤去 ↓土壁の撤去



○六月二十六日(土) 土蔵撤去作業の終了

ちよっとナナメに

『諏訪形誌』を歩く(三)

副自治会長 窪田善雄

諏訪形のミホトケたち(後編)

諏訪形のミホトケ巡り

今回は、仏教のあゆみを通して、シヤカ以外にも多くのミホトケが生まれていったメカニズムについて述べました。それを踏まえて今回は、そうしたミホトケを諏訪形に訪ねてみたいと思います。

○金窓寺のミホトケたち

本尊 阿弥陀如来(本堂中央仏壇)



金窓寺は、曹洞宗で禅宗のお寺です。禅宗は「座禅」という修行を重視しており、釈迦オリジナル仏教の匂いが濃厚で、二本尊は釈迦如来であることが通例です。実際、『諏訪形誌』にも本尊を釈迦牟尼仏と記載してあります。ところが、藤原廣生住職にお聞きすると、意外なことに、本尊は阿弥陀如来とのことでした。『諏訪形誌』の記述は誤りということになります。確かに、禅宗は釈迦如来を本尊とすることが多いのですが、特にきまりがあるわけではなく、各寺院の由緒によって阿弥陀仏であることもあるのだそうです。

このミホトケが阿弥陀如来であることは、手の形で分かります。親指と人差指でリングを作り、両手を合わせて膝の上に置く、これを「上品上生印」といって、阿弥陀如来の典型パターンの一つです。残念ながらこの仏像の来歴などは不明です。

釈迦如来(位牌堂中央仏壇)



本堂の南に位牌堂が付属していますが、その中央仏壇に釈迦如来が安置されています。平成二十二年に本堂が落成したおり、信者の方から寄進されました。両手は、説法する形で「施無畏・与願印」と称します。

釈迦三尊像(「古笈」内仏像)

金窓寺の伝承によれば、滅亡した武田家にゆかりの女性、玉窓金法尼が、慶長元年(一五九六)この地に移住し、武田一門の菩提を弔うため、小さな庵を構えたのが寺の始まりとされています。このとき尼僧が持参したとされる木箱が保管されています。ランドセルのように背負う仏具で、古笈と呼ばれる、金窓寺最古の寺宝です。この木箱のなかに小さな釈迦三尊像が納められていました。四百数十年前の仏像の可能性のある貴重な文化財です。



釈迦三尊像は、いくつかのパターンがあります。右に獅子に乗った文殊菩薩、左に象に乗った普賢菩薩という形式が一般的で、この像もそうになっています。



文殊菩薩、普賢菩薩は、釈迦を主人公とする經典『法華経』や『華嚴経』などの重要な登場人物であり、釈迦に仕える菩薩の代表格となっています。

薬師三尊像(本堂東側仏壇)



日光菩薩



薬壺



月光菩薩

金窓寺には、先々代住職のころまで、旧本堂北東の一部に薬師堂があり、参拝も行われていたようですが、今はその仏事もなくなっています。このことを機縁として檀家信徒の浄財も募り、平成三十年、本堂東側仏壇上に、新たに薬師三尊像を安置することとなりました。

薬師如来は、

經典『薬師瑠璃光如来本願功德経』に登場する如来で、それによれば、かつて薬師如来が菩薩であった時、人々を病氣から救うなどの十二の本願を立て修行に励んだといわれています。このことから薬師如来像は手のひらに薬壺を持ちます。現世利益傾向が非常に強い仏で、身分を越えて多くの人々の信仰を集めてきました。また、この經典の記述に従い、日光、月光両菩薩とともに三尊像を構成します。

○カンカン石

(阿弥陀如来ってどんなホトケ?)

叩くとカンカン鳴るのでカンカン石……「マジですか?」と言いたくなるようないわれですが、それはともかく、江戸時代後期、紀州の徳本上人が「ナムアマダブツ」を唱えて全国を巡り巻き起こした浄土教の大ブームを記念する石碑です。



うんちくを言うようですが、そもそも「南無」とは、サンスクリット語 namo「帰依します」の音写で「南無阿弥陀仏」は「阿弥陀如来に帰依します」という意味です。この仏は、原語では「アミタ・ユースブツダ」「量りしれ無の寿命をもつ仏」であり、「アミタ」に無理やり漢字を当てて「阿弥陀仏」としました。意味を重視して「無量寿如来」ともいいます。(分りにくい話でスミマセン。)

この仏を主人公とする經典は『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三つで、岩波文庫で現代日本語に翻訳されています。なかなかおもしろいですよ。そのうち『無量寿経』の語るところによれば阿弥陀如来は、菩薩時代、四十八の本願を立てその一つで「自分の名前を唱えて願う人は、誰でも極楽浄土へ連れていく」と誓いました。これは極楽行き無料チケットの大量配布のようなものです。これを根本教義とした宗派が浄土宗や浄土真宗で、大勢の信者を集め、隆盛を極めました。徳本上人の巻き起こした宗教的興奮もその一つです。金窓寺の本尊が阿弥陀如来であるのもその影響かもしれません。……これは、勝手な想像です。(了)

編集後記

東京オリンピックが目前となりました。いろいろな意味で歴史に残る大会となるでしょう。私たちは、その体験者となるのですね。

編集責任（副自治会長 窪田善雄）